

Title	島々の話：記念講演(史學科創立五十年に際して)
Sub Title	A memorial lecture commemorating the Fiftieth Anniversary of Historical Department, Faculty of Literature, Keio University
Author	柳田, 國男(Yamagida, Kunio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1961
Jtitle	史学 Vol.34, No.1 (1961. 7) ,p.1- 13
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19610700-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

島々の話

記念講演（史學科創立五十年に際して）

柳田國男

この講演で申上げたいと思つてまいりましたことは、たゞ今の松本さんのお話で、だいたい要を盡しておりますので、私の話は大分重複し、無駄も多かろうと思いますが、今日は若い諸君に對して自分の今思つてることを一通りはなしたいと思つて出てまいりました。

この講演を準備しようと思いまして、そのころの日記を讀んだのですが、それによりますと大正十四年までは私はたしかにこゝで講義をしております。⁽¹⁾始めましたのはごく一時的の話もあわせまして大正八年⁽²⁾でございます。私は早く役人の生活にあきていましたので、機會を求めて役人をやめましたが、太正八年の暮でした。その大正八年の日記を見ましたところ、三田の三年生の松本信廣さんの名が出ているのです。まちがつていなかつたということが、今日の松本さんのお話でわかつたのであります。それから「地人會」という會に参りまして話をしました。⁽³⁾そのあとでどの部屋でしたか、もうなくなつてゐる部屋かもしれません、そこで偶然にはじめて會つたのが阿部次郎君と小宮豊隆君の二人なんです。私の話を聞いてくれまして、あとでお茶を飲もうじやないかといつて、こちらの教員室で話をしましたのが

非常に印象に強く残つております。田中萃一郎さんの中も私はよく知つておりましたが、早くお別れでしまいました。この兩君がなぜ私にそんな興味を持つたかということも、私はおもしろいと思つたのであります。それはほどなく東北大學へ行つてしまふ計画があつたので、誰かかわりがないかしらと物色しておつた際に、私がちょうどぶつかつたのだろうと思います。

十三年十四年にはたしかにここで講義をしておりました。日記を出してみますとなか／＼よく勉強してやつております。たしか火曜日だと思いましたが、五人とか六人とかを相手に三年ほどやつてゐるのです。はつきりいつまでということは、まだ日記をここまで見ておりませんのでわかりませんが、そういう因縁がこの學校にあつたのです。今日は史學のほうの記念の會ということですが、私どもの學問と、史學との間の關係がどういうふうになつてゐるかということが一番必要ではないかしらと思つて、そのほうの話の支度を少しばかりしてまいりました。

ごく簡単に申しますと、史料といふものの種類分けが、もしくは史料の定義が、日本のそれまでの史學、ことに國史について大變窮屈なのです。耳で聞いてきて手帳につけておいたなんていふのは史料にむろん入らないし、目で見てきたなんていうのは引用ができませんから史料には決して入れないので。そういう状態のときに私だけが、これも歴史だということを言いますのは非常に骨の折れることであります。三田で、はたして史學のうちとして私どもをお許しになつたのか、それともあれは史學に準ずべきものとせられたか、あるいは史學に關係のあるものと見られたのかよくわかりませんが、私はどちらかと申せば書物によるふうなことを避けまして、傍證の必要なときに、昔からあつたということを證據だてるときには、文書史料を證據にいたしましただけで、できるだけ現實を、「うそだと思うなら見ていらつしやい」と言えるようなことを史料にして話しようとしたのであります。こういう講義を何故史學科の中へお加えになつ

たのか、私は今でもまだ疑問に感じておりますが、おそらくはここにおられる諸君が「そのくらいのものまで入れなければどうも窮屈でしかたがない、史料が納屋に行つて鍵をあけなければ見られないというのでは困るから」というふうなことがあつたのではないかと思います。それで私はできるだけ自分で資料を持つてきて陳列しようという氣持になつたのであります。

日本のような國の特徴はどこにあるのかというと、京都が古くからあつて變らなかつたとか、武士が長い間續いて刀をさしておつたとかいうことではなくて、むしろ知られざる島々、村々というものがたくさんある。村はこれでも通りすがりにも通りますし、人々がふえてまいりますれば以前は村であつたものが町にも市にもなりますが、島はそうはないかないのであります。人々は目にたつほどふえませんで、そこに行つてみると同じ言葉が耳を通じてわかるし、ナマリがあるかもしれません、耳で聞けばわかる言葉を話しているのであります。開けた交通のいい土地において、すでに消えてしまつたような精神史料が島にはまだ残つているのです。どうかしてそれを證明しなければいかんということが、私どもの早くからの念慮であつたのであります。しかし役人をしておりますと、私のおりました所はずいぶんひまな役所でしたが、島に渡るということはなかなか許されないことでした。ですからどうしても役人生活とわれわれの研究生活とは兩立し難いものがあります。そこで私は大正八年の暮に役人をやめましたが、その時は非常な解放感をおぼえました。幸か不幸かその時、幸にはちがいないのですが、朝日新聞が社員になつてくれ、行きたい所があれば旅費を出してやるからと言つてくれたので實にのびのびした氣持で、ちょうど巣立つた小鳥のような心持で、いろいろな島に行つてみようと思いました。その中には瀬戸内海の、どこら邊にあるのかと、人にきかれるような小さい島もだいぶ歩きました。大正九年は三十日以上も岩手の海岸のほうを歩きました。松本さんが實に達者に歩いて同行して下さつたので、

海岸のひどい所なのですが、右に行くのがいいか、左に行くのがいいかと言いますと、「ちょっと見てきましょ」なんて言つて、さつと高い所まで上つて見てきて、右ですとか左ですかいうようにすぐ答えてくれる。そういう心強い同行者と東北を歩いたのであります。これは幸いにして本になりました。「雪國の春」というしやれた表題がついている紀行であります。そのうちの一一番最初の文章を朝日新聞に連載してくれました。こんな楽しい旅をしておりますうち、松本君と別れてから後だと思ひます。青森縣の東北の突端にある尻屋という燈臺へまいりました。燈臺員といろいろ話をしているうちに、「今年のうちに私は九州南端の佐多岬へ行くからそこから年始状を上げるから」という約束をしてしまつたのです。「私もあそこにしばらく居りました」と燈臺員がいいますので、すつかりそれに刺激をうけましたらしく、こんな約束をして、とうとうその年の暮から元旦にかけて佐多岬を歩いてしまいました。勿論尻屋の燈臺には約束通り年始状を出しました。あけて大正十年一月四日か五日と思ひますが鹿児島へ戻り、沖縄に渡つたのであります。一通り沖縄本島を見ましたのに、宮古島へ渡り、それから八重山に渡り、主な島しか見ていないのであります。が、一通り見て歸つてきましたのに、宮古島へ渡り、それから八重山に渡り、主な島しか見ていないのであります。がいやになつて「もう琉球の話はたくさんだ」と蔭でいうのみならず、前でいう人さえ出来てしましました。

こんな自由な状態にしておりましたところが、好事魔多しとか言いまして、ちようど態本まで歸つてしまつたのが十一年の紀元節の少し後のことだと思ひましたが、東京から電報がきまして、國際連盟の委員になつてヨーロッパに行つてくれとのことです。朝日新聞に席がありましたから大阪朝日新聞の社長と、養父のところへ問合せの電報をうつたのです。そうしましたらわかりきつている話なんですが、「結構なり、行くべし」というので、言い合わせたように返事がきましたので、決心して、そのまま歸つてきました。十二年の震災の時、ロンドンに居ましたが、驚いてアメリカを

通つて歸郷致しましたが、それからずつと私は殆ど東京で暮らしております。

そしていつまでたつても今申したような子供らしさと、意地つぱりの氣持が残りまして、足がよほど悪くなるまで歩いておりましたが、今はもうさすがに島へ行くのは困難で、特に沖縄の島などは南に長くつゞいていますので、自分で行くというには容易なことではありません。最近はなるべく大勢の人に行かせるように心がけてきましたが、それがこのごろようやく成功し始めたのであります。はじめのうちはどこへでも行きたい。もしくは行つて住みたいという空想を抱いているような青年男子が主として行きましたのが、このごろはあそこの島が見たいから、あそこを調査したいといつてでかけるのです。これは私としては大きな成功であります。

沖縄の先島列島の中の宮古島というのは、まずしい所で、貧富を均等にしましたら皆食えなくなりますので、とかく自分一人だけがなんとかよい暮しをしようという氣持が、早くから強い所がありました。そういうた人達の多くが、平良という島の西南部に開けている港附近に集つて居りますので、他島の人がきますと、まずその人達が應接をする、従つてともすると評判を悪くしがちになりました。しかし事實はそうではないのです。悪い人はわずかしかいないので、他の邊鄙な所に住んでいる者はそうではないのです。この島は宗教が女の管轄になつていますが、それを支配しているおばあさん達の氣持は、純粹なものを持つてゐるのです。こういう人達はあまり旅人に接しませんので、島の良さが氣づかれずに、ただ入口だけのわざかな人達によつて島全體をあれこれいわれてまいりました。宮古島の北部に池間島という小さな島があります。この島の神社の信仰、これはオタケという森の信仰ですが、それは五十才以上になる女達が支配していて、祭りは決してさびしくないのです。のぞいてみるだけで、我々はオタケの中に入ることは遠慮しておるのでですが、この中には何もなくて、眞中に砂を集めた山がありまして、そこにお燈明の皿が埋めてある。こうい

うような所でお祭をして居りながら、この人達は實に強い信仰を持つてゐる所であります。そのかわりときどきは他の者と妥協しないところがあつたりして、男の教員なんかはどちらかといふとびくくしておりますが、それでも長く住んでいるうちにいいところが分つて、同情をもつていろいろな話をするし、私の所に來ます女性などはその土地の空氣、女の空氣にすつかりチャームされて、二度もそこに行くというのがいるくらいです。

いろいろな話があるのですが、この女性が先年の旅行の折、島のまつりの様子を寫眞にとつてきました。それをたまたま東京に出てきた島出身の娘さんに見せたところ、「うちのお母さんがタバコを吸つてゐる」といつてびっくりしたというのです。女がタバコを吸い出したら年百年中長ギセルを離さないで持つように、非常に女と關係の濃いものなんですが、その寫眞の中にある人は、吸うということを娘さんが知らない、つまり家では吸つていないで、オタケの祭りをする時にだけ吸つてゐるのです。私はその話を聞いた時に、非常に興味を持ちまして、誰かに話をしたく、一人で膝をたたいたくらいでした。つまりタバコというものは香爐などと同じで、女自身が香爐みたいになつて煙を上げているのが、内にも外にも共通な影響があるのでないかと思います。これではじめてわかりましたが、沖縄の維新前の王政時代に、王様が位につきますと、宮古島と八重山の大司うぶつかさという一番偉い巫女の頭が御代始めのお祝といつて土地土地の織物などを持つてわざわざ首里までくるのですが、その時王家から賜わるもののは何かというと、タバコの葉二十枚とか年によつてタバコの葉十枚なんて不景氣な年がありますが、それを司という巫女の頭にたまわるのです。ひどい話だと、私は一人で憤慨しておりますが、これは普通の貿易ではなかつたのです。つまり女にとつてタバコというものは信仰状態に入る一つの棄だつたのです。獻上物のあいさつにも王室から出るというくらいタバコは重要だつたのであります。したがつて日頃はしまつておいて、お祭りの日だけ長ギセルを持つて吸うということもあつて、こんなことを日

本でやろうものなら「ふらちなおかみさん」ということになりますけれども、島ではタバコを吸うということが、自分の心と神様との両方へ兼ねて香をたいているようなもので、その氣持がわかりました。今まで知らずに「われわれは沖縄のことなら一通り知つていて」とか「現在の状況はこうだ」なんて教えがましいことを言いましたけれども、まだたくさんいろいろなことが残つていて、日本は幸福な國だと思いました。國內の同胞の中には言葉が通じながら、古風な、都會人の知らないことをやつていてる人が住んでいます。われわれがこれから學問をすれば學べる心理現象が存在しているのです。それを史料というものは文字に書いたものでなければならない、というだけでもはなはだ失禮なのに、それへもつてきてきれいな字で美濃紙の大きいのに書いた古色を帯びたものでなければならぬ、シミがついていなければならぬというにいたつては、それは實にひどい話なんです。われわれの史料というものの範圍にはどうしても、殊に日本の如くに漢字を教えるのに、何年もかかるという國においては、いろいろな記憶や、印象をも含めなければならないのです。

しかし私がはじめて今から四十年ばかり前にこの大學に参りました時分には、おそるおそるこういふことをいつたのです。あまりに東大の史料編纂という所が頑固で、文書というのは大よそこんな形をし、こんな色をし、こんな匂いのするものでなければならないというようにいいまして、それにもとづいていわなければ國史でないというふうな、これは極端な言いかたですけれども、とにかくそういうきらいのある史料の扱い方をしておつたのです。史料というものは非常に無邊なものです。ただそれが史料編纂所の史料でないということはいえるかもしませんが、われわれはこれから先、自分の國の國民の経てきた過去、喜び、悲しみ、憂い、すべての過去のものを明らかにしようとする中には、そんな資料の好き嫌いなんかしていることはできません。私は前から考えておつたの

であります。史料になるということを確かめてでなければ使えませんし、またあてずつぱうにウソのものを読まされでは困るけれども、そうでなければちよつとでも廣く、目に訴えるものでも耳に訴えるものでも、ときと場合によつては鼻に訴えるものでも、その印象が人に傳えることの可能なものであるならば、それを史料にしなければ過去のことはわかりません。ことに主だつてゐる政治家の行動とかいうようなことを史學の中心にするのなら別でありますけれども、今の時代はそうではなくて、日本人にあらざるものと區別して、日本人が過去にいかなる悩みを経、憂いを重ねて今までだんだんに大きくなつてきたかということを知らなければならぬのですから、史料のえり好みをしてはいけないということを、私は今更の如く感ずるのであります。

私どもが民間傳承という言葉を使ひはじめました時分には、あれはトラジシオン・ポピュレールというフランス語を私が譯しただけなんですが、口で読んで、耳を引つぱつて聞いて、それで生きてきたようなものだけがトラジシオンだつたので、それ以外の偶然に残つておる、たとえば岩の大きいのがこゝに一つあるとか、珍らしい大木がこゝにあるといふことまでも史料にして國史を論ずるということは不備な話、不當な話だということになつておつたのです。今なら少しも遠慮しないで、「これでも史料ですよ、これだつて歴史ですよ」ということを言ふのですが、史という字がくせものなんです。これは文^{フミ}という字と同じで、史の字は“書く人”^{フヒト}ということですから、「文を書く人」ですから史といつたりしておりますが、これはたいてい百濟かなんかから移住してきた外國人が多いのですが、その人たちに書かせたものを讀んで、「これをごらんなさい、これがこうで」と説明をしなければ歴史でないという氣持がまだ残つているのであります。これは私は考えてみなければならんと思いました。民俗學と稱するのは、この言葉がいいか悪いかはまた別の問題といたしまして、どうしてもわれわれの要求するところの廣い意味の“史”であることがわかつたので

ありますが、殘念なことにはそれを知るのが少し遅く、もう私たちの孫でももつと大きいのがあると思うみなさん、曾孫ぐらいに當る方にここではじめてお話をして公々然と「歴史」というものはこういうものまで使つてさしつかえないものだ」ということをいえることにやつとなつたのですから、實際いうと自分ながらかわいそうなものだと思います。むかしこゝで講義致しましたときには、むろん史學科の中で私の話をきいて下さつたのですが、私はたびたび言いわけがましい言葉をつけて、こうすることもやつておかなければいけないのだと、耳で傳わつてているもの、口で傳わつているものも聞かなければならぬのだという、いろいろな制限をつけて聞いていただいたのであります。しかし廣い意味の“史”というものは全體字で書くものだからどうだかわからないのです。もし字で書くものならば日本人の古い歴史がたくさん残つてゐるということは自慢にもならないのです。非常にわずかな人の読み得る、今だつて六國史をみんな讀んだといふ人は歴史家中にもいくらもないくらいなんでありますから、それから後になると少し史料の數がふえて参ります。けれども平家物語の時代になりますと、あれは文學ではあるけれども史料ではないのですから、昔の歴史家みたいにあれをみんな史料にして書いたらかえつて害があるので、むしろどちらかといふと嚴重に書いたものの中から選定して、これだけは史料として認めてやつてよろしいというようなふうにしなければなりません。ところが一生文字に現われない、古くから傳わつたものはどこへ片づけてどこへしまつておくか、どこで利用するかということが多くなつて、その弊害はすでに現われておるのであります。日本人がどうして今日のような状態を作つたかというときに、議論をする人のいうことを注意してききますとよくわかりますが、それはみんな文字に書いたものを證據に、こういうことを書いてあるから、こういうことをいつた人が昔はあるから、というふうにして、書いたものだけでやるのであります。私どもはこの日本のような、人間がどこから入つてきたかわからない、どのくらいの程度にまでいりまじつてい

るかわからない、昔の生活の争いとか、もめごととか、いろいろごたごたしたものを見らかにする爲には、ちよつとでも異種な、カテゴリーの違つた人間の経験を持つてきて歴史にしなければならないのです。

今も松本先生からのお話もございましたけれども、われわれの持つてゐる歴史の史料というものが書いたものだけだつたら、ほんとに分ることばかり多くて困るのです。わかりすぎて困る、わからないことがなきすぎて困る、しかし實際はそうではないのです。今日いろいろわれわれが予期しないような新しい時代の事實といいうものが起りますが、基づくところがなくておきる氣づかいはないのでありますから、單に古くから残つてゐる言い傳えとかなんとかいふものだけではなく、いろいろなものを持つてきて資料にしなければならないのです。日本は幸いなことには、一年に一ペんしか交通することのできない、ことによると三年も五年も行き來をしないといふ離島をたくさん持つております。私どもが渡つていけるような所は、多くの人たちが行つていますけれども、それでも、たとえば同じ瀬戸内海でも島によつていろいろちがいがあります。ましてや離れている島々の生活というのは、これが日本人の生活の一部分であるということを安心していためにはもう少し知らなければなりません。伊豆七島なんかは東京から行きいいところでありましたから、あれを利用しようとした心がけのいい學者もたくさんおりましたが、これだつてまだほんとうにはわかつております。八丈島の歴史だつて、足利の末ぐらいのころからのものがかすかに残つてゐるだけで、それも中央の人の書いた記録があります。しかし八丈島ではたびたび死に絶えたことがあるといふ言ひ傳えもありますので、人のいなかつた時といふことも考えられます。よそから漂流して一人で入つてきて島におるといつてもとても暮せるものではないのですから、無人島に漂流した者は多くはみんな死に絶えてしましました。しかし女房子供のある

人間の住んでいる島であるならば、行つてまじりこむことができます。この海上の交通というものが今日のところではまだ不確かで明らかでないのです。八丈島のことときあの黒潮の向うにある島に、どうしてあれだけの人數のものが一緒になつてやつてきたか、ことがわからぬのです。

とにかく古くから島には、人が住んでおつて、その人はやはり日本人であつたのであります。われわれの行つている島というのは非常に數が少ないのでして、わざわざ島の生活を調査するためにも活動したこともありますけれども、これは九牛の一毛にすぎません。海上は向うからくればともかく、こちらからはあまり用がありません。漂着していく具合に娘ばかり多くて男が少くて困つていたなんていうのはめつたにありませんから、その連絡は十分にとれないのです。島の歴史といふものは、神代史以上なのであります。島の數はむろん千何百もあるのですが、そのうちで人間が住んでいる島は五百と言つておりますが、それは少しうちわに見ていいと思ひます。近年になつてから開け始めたところがあるし、どこから來たかといふことがよくわかつてゐる所もありますが、大部分の島の歴史はよくわかつておりません。政府の方はそんなことはとんじやくなしに、どこも全國均一なる教育制度をしいたりしておるのであります。それで人口いくらということばかり氣にしていますが、この人口の中には一年に三べんか四へんしかよその村の者と行き來をしない者がいるのです。かような珍らしい状態にありながら、こういふものを資料にして昔のことを考えてみようといふ氣持が起らなかつたのは、中央の文献資料があまりに有力であつたからであります。それを考えますと、三十年以上前にこちらへ參つていろいろの話をしたときに、もう少し國史といふものと、われわれの學問との關係、もつと平たくいふならばわれわれの仕事が廣い意味の國史のうちでどれだけの部分までは働き得るかということをいえばよかつたと思います。今日は松本さんが丁度そのお話を出しになつたので、私も思わずしらずよけいなことを申したが、日本

では島なんかにいる者が「數にもならぬ」という、よく昔文學なんかにあります女が遠慮するときに「數ならぬ身」なんて申して、自分らは勘定に入れないほうが當然のようなことを申したが、のように、あたかもなんらの史料もたずさえていかのごとくに言つておりました。しかしこの人達の生活は完全なる意味において史學の大きなテーマでございます。特に日本のごとく離れ離れになつて、山の中に、もしくは海の沖に小さな群をなして住んでいる人が多く、それがだんだん入りまじつて、しまいにはわからなくなろうとしているところでは、このような生活をぜひとも知らなければならぬというのが、今の私の考え方であります。

どうも口ばかり大きなことをいいましても仕事は進んでおりませんが、さいわいにして戦争中ちつとも外との交通がなかつたものですから、その間ごくわずかな數ですがこの方面にたずさわる人がありました。それからまた昔のことを見出する人間がおそらくは世の中が暗かつたり、苦しかつたりするたびに、少しずつふえていくのではないかと思います。そういたしますと、以前私がこゝで話をいたしました時には、非常に小さくなつて、史學の一部分に片足をかけて話をさせていただきましたが、今ではどちらかというとほかの連中をそばに寄せずというような氣持で、國民のために昔のことを考えたいと思つてゐるのであります。

ところが最近になつてみると、何か國に問題があると、フランスではどうなつてゐるとか、ベルギーではどんなふうになつてゐるかというようなことばかり参考にしたがります。自分らの昔はどうしておつたかということは、「どうせだめなんだ、どうせつまらんことばかりやつてゐるのだ」という氣持が大變強くて、考えてみようとしないのであります。正直なことを申上げますと、慶應などはどちらかというとそのほうの側の人の多いところだと思つてゐるのです。勿論それも必要なんです。みんなが盾ばかり持つて槍を使わなくても困るのですから、それもいいのです。實は今日松

本さんのお話をきいておつて勇氣づけられたのでございますが、われわれはあまり遠慮しすぎて、軒端をかりて別
の學問といったような心持で、遠慮をしいしい、こゝで四年なり五年なり民俗學の講義をしてきたことが殘念でたまり
ません。それからこのかた、いろいろと新しいことで力づけられたことがあるのでござりますけれども、殘念なことに
はもう私自身はそれを喋れません。まだなにかお聞きになりたいことがありますたらお答えいたしますけれども、あま
り喋りますと何をいい出すかわからんから、このくらいのところで終りにしたいと思います。（談話筆記）

編 著 註

- (1) 大正十三年四月大學文學部講師として就任、昭和四年三月をもつて同講師を退任されている。
- (2) 三田山岳會（山岳部の前身）の大會で山と生活とに關する講演をされたことがある。
- (3) 大正十年四月二十八日 地人會にて講演、演題は「琉球の文献」。